

「優しさいっぱい」社会の得失

京都大学公共政策大学院特別教授

佐伯 英隆

へうす味化する日本映画

今となつては叶わぬ夢だが、映画監督、というより映画制作者になりたかった。高校2年のとき、学校非公認で「映画部」というのを立ち上げ、8ミリフィルムの劇映画を2本作り、学園祭で1人30円の入場料で黒字にしたことが、著名（＝悪名）受験高校時代の唯一の楽しい思い出である。という訳で、今でも映画には人一倍の思い入れがある。

記憶はぼやけて来たが、映画館に出入りし始めたのは小学校高学年（1950年代終わり頃）から。不良少年にはならなかったものの、いけない事をしているという自覚はあった。今から振り返ると、当時が日本映画の黄金時代だったようで、荒唐無稽な作品も多かったけれど、少なくとも映画制作者の側にお金を払って映画館に来た客をいっぱい楽しませてやろう、という意気込みは、今よりも強かったように思うし、何本かの日本映画

がその後の世界の映画作りに恒久的なインパクトを与えた時代でもあった。

その時代に比べると、最近の日本映画のスケールの小ささ、構

想力の矮小さは残念である。当時は『釈迦』『楊貴妃』など、他国の歴史物を日本映画にするという映画制作者側の企画の大胆さ、向こう見ずさ、構想力の骨太さが普通に見られ、かつ興行的にもそれなりの成功を収めていた。近年では、見果てぬ夢を追いつける角川春樹氏のみが『蒼き狼』でチャレンジしたのがほぼ唯一の例外で、それも興行的には惨めな失敗に終わっており、他の映画制作者からこういう構想が出てくることは無さそうである。

結果、近年の日本映画は、私小説的、四畳半的、チマチマとしたスケールの中で、ホームランか三振かという構えではなく、無難にバントか内野安打を狙うという作品ばかりになってしまった。最近の日本映画で、面白いチャンバラや、壮大な歴史スペクタクルや、勇ましい戦争映画を見ることが絶えて無くなった。「家族の絆をしっかりと見つめる」ことも、「社会の片隅に宝石の輝きを見出す」ことも、

映画のテーマとしては結構であるが、毎日、京風うす味懐石料理かヘルシーフードばかり食べさせられているようで、女性優先、女性尊重も良いが、人口の半分は男なのだから、たまには悪性コレステロールたっぷりの血の滴るビフテキも食べたいものだ。

嘗ての日本映画はゴジラを世界に送り出した。今の日本映画はゴジラのリメイクは出来るが、ゴジラを世界に送り出す気概が失せてしまっている。

それに加えて、近頃つくづく残念なのは日本の男優の存在感の希薄さである。少し前までは世界に通用するアジアの男優といえば早川雪舟（ちよつと古すぎるが）、から始まってトシロー・ミフネは言うに及ばず、仲代達也、高倉健と間違いなく日本人男優が思い浮かぶのであったが、最近渡辺謙が唯一人気を吐いているのみで、トニー・レオン、アン・ディ・ラウ、ジャッキー・チェン、ジェット・リーなどなど軒並み中国系男優である。

彼らと日本人男優を比較した場合、最大の違いはその圧倒的な「男臭さ」である。彼らが体現しているのは勇氣・決断・名譽・冒険心・自己責任或いは自己犠牲といった昔からの「男らしさ」という言葉で表現される何ものか（時としてそれは物理的力・暴力を伴う

ものゝである一方、(日本で人気のある)日本人男優に共通するのは、ひたすら「優しさ」、それもフニヤとした優しさである。

最近リメイクされた『椿三十郎』『隠し砦の三悪人』何れも映画として酷い出来であるが何よりも、出演男優たちがオリジナルの男優と比べて何とガキっぽく見えることか。凡そ男臭さとは縁遠く、テレビのホームドラマに出てくる近所のイケ面のヤワ兄ちゃん風ばかり。こういう風なのが日本では受けるから映画制作者もそういう俳優を使うわけだが、話は単純で、日本で受ける男優が世界では全く受けないということは、日本と世界ではこの分野で価値観が異なるということである。

世界に存在するであろう何十万という映画館の銀幕で金を払って見に来た大衆をひきつけるのは、やはり「男は男らしく」であって、日本風の私小説的ヤワな優しさではないようだ。

へ「優しさ」が溢れた社会

今日、小児教育の最大の徳目は「優しさ」と調和」のようで、これを受けてかどうかは判らないが、社会には「優しさ」の言葉が溢れている。どちらを見ても「〇〇に優しい」「＊に優しい」、何にでも「優しい」を付ければ、

(C) SozaiRoom.com

売れるか受けるかとも云うようで、いい加減飽食気味である。その一方、「勇氣」とか「冒險」とか「名誉」は紛争・暴力・戦争に繋がりにかからないから、とても云うのであろうか、殆ど語られることが無くなった。「忍耐」することは割に合わないことで、あくまでお気軽・簡便に、「決断」は独断と同義語であり、「自己犠牲」は戦前の悪しき教育の結果、という次第である。

「優しさ」も大いに結構。世代を越えて伝えられるべき重要な徳目である。優しさや思いやりに欠けた社会というのは生きていくのに辛い社会である。しかし、社会全体がその価値観のみ、それ一色というのは如何なものであろう。とりわけ、その社会が内外からの挑戦や危機に直面した場合、或いは新たな次の飛躍が求められている場合、勇氣や忍耐、冒険心や自己犠牲といったものに価値を置かない社会というものが、上手くその時代を乗り切って行けるのだろうか。

「優しさ」系価値観、即ち、安全・安心・平穏・平和・調和そして結果における平等を何よりも優先する社会、流行の言葉で言えば「スイーツ系社会」では、勇氣・冒険(「ベンチャー」・リスク・変化・競争(「闘争」)そして結果における不平等の容認という考え方

は排斥されがちである。

国際社会の中で、今後ともわが国がスイーツ系社会一辺倒でやって行ければそれでも良いのであろうが、わが国以外は殆ど全て「非スイーツ系」の国家である。とりわけわが国は「非スイーツ系」国家の上位を占める国々..物理的力・軍事力の信奉者である米国、ロシア、中国、韓国、北朝鮮に囲まれている。中国などは、毛沢東曰くの「権力は銃口から生まれる」を文字通り実践している国である。

加えて、優しさ一辺倒の国はそれなりのコストを「即ち、誰からも嫌われることは無いが、誰からも一目置かれることも無い」というコストを「支払う必要があるように思う。学校でイジメがあっても、イジメをした本人の責任を先ず追及することをせずに、クラスみんなで考えよう、学校に問題がある、社会がいけない、政府が悪い、という風にどんどん責任が拡散していつて、結局みんなが悪い、言い換えれば誰も責任を取らないというシステムの国、或いは、多くの場合、組織の中にとどまる限り、個人の責任はとことんまで追及されることは無い代わりに、個人として突出することも許されないというシステムの国が、世界をリードしていける国家たり得るのであろうか。

「安全・安心・優しさ」至上主義

世界的なネットワークを持つ旅行代理店の最新の国際比較調査によれば、年間有給休暇消化日数でわが国は先進国中最下位。消化できない理由で最も多いのが「仕事が忙しく休暇をとる暇が無い」とのこと。つまり日本人は未だに一生懸命働いているということである。ところがOECD統計によれば、わが国の一人当たり生産性（全産業）はOECD諸国中最下位に近く、下に居るのはイタリアとスペインだけという有様。製造業のみの国際比較ではまだわが国は比較的高位にあるのを、サービス業（事務職）の生産性の低さが足を引っ張っているというのが定説である。OECD諸国中一番「働いている（少なくとも労働時間を提供している）」のに、一番生産性が低い日本のサービス産業という結果を見れば、日本の事務職（ホワイトカラー）は生産性の低い「全くのダメ集団」ということになる。

集団としての日本人の能力がさほど低いとは思いたくないとすれば、何かわが国のサービス産業の仕事の仕方・考え方・システムに問題があるのしか考えられない。

私にはこの問題の根底に「安全・安心・優しさときめ細かな気配り」絶対至上主義があるように思えてならない。

海外へ一度でも渡航した人は、わが国での外貨両替の非効率さに気がついていると思う。そもそも先進国を名乗る国で、両替の度に氏名と連絡先を記入した用紙を提出しなければ両替が出来ない国など聞いたことがない。後発発展途上国なみのこのばかげたシステム（だいいち、ウソを書いてもチェックのしようも無い）について、一度、銀行に勤めている友人にきいてみたが、一昔前、外貨管理をしていた時代の日銀の行政指導をそのまま引きずっているとのこと。まあ、其の事は横に置いたとして、要はその驚くべき効率の悪さである。世界中の殆どの国で、1つの両替の窓口にいる要員は1人であり、その担当者が金を受け取り、計算し、支払いを行う、もし間違いがあればその担当者の責任であり、その場で是正する、というのが常識である。ところが、ある日の成田空港での両替窓口の風景を描写してみると、3つの窓口それぞれ窓口担当者が座っているのは良いとして、その窓口担当者の後ろに1人ずつオジさんが合計3人、さらに何をしているのか良く判らないがその後ろに、奥から出たり入ったり（多分お金を出したり入れたり）している人が1人、極めつけは用紙記入テーブルの脇に（ご案内係という腕章を付けた）オジさんが2人、

Photo by (c)Tomo.Yun (<http://www.yunphoto.net>)

で3つの窓口に合計9人、1つの窓口に平均3人の要員を貼り付けていながら当然それだけの人件費をかけながら、お金が出てくるのは海外での両替に比べて決して早くない、というより遅い。これも何故かと聞けば、2列目の人は「間違いがあるとお客様に失礼になるので、確認をしております」、3列目の人は「お金の出し入れに間違いが無いように最終確認をしている」のであって、テーブル脇のオジさんは文字通り「お客様へのお手伝い」だそうである。そんなこと一人で、一人の責任で、出来るだろうという問いに対しては、お客様に「安心できめ細かなサービス」を提供するために必要な人員なのだそうである。

市中の銀行の窓口もしかり、銀行の入り口を入ると、なにやら訳の判らない「お客様掛」と称する要員が寄ってきて何くれとなく世話を焼こうとするが、殆どの場合世話を焼いて頂く必要はなく、かえってウザイだけではないだろうか。この人の人件費を預金者が負担するくらいならその分、預金金利を上げてくれと言いたいところである。確かに障害を抱えている客にはそのようなお世話が必要であり、場合に依りて適宜そのようなサービスが提供されるべきであろうが、健常者の大人には通常そのようなベタベタした「サービス」は不

佐伯 英隆

さえき ひでたか



昭和 26 年大阪府出身。
東京大学法学部、ハーバード大学 J.K. ケネディ 行政大学院卒。昭和 49 年通産省入省 新映像産業室長、国際資源課長、在ジュネーブ政府代表部参事官、島根

県警察本部長、通商政策審議官（APEC, ASEAN 担当）経済産業研究所副所長などを経て平成 16 年退官。現在は京都大学公共政策大学院特別教授、（株）イリス経済研究所代表取締役、スーダン政府大統領府 WTO 加盟交渉団顧問等。

要である。また、窓口担当者の後ろにズラッと並んだ（中間的）要員が何をしているのかと言え、一口で言えば「間違いがないように」チェックしているのである。つまりは、全ての人に「万全の安心できめ細かなサービス」を提供するために人件費が膨らんでいるわけで、そのコスト高のツケは結局利用者に回されることとなる。

道路工事の現場では、工事の規模・様態・状況に関わらず、必ず「安全のため」赤白の旗を持ったオッサンが居て、車両誘導するのだが、殆どの場合全く必要性を感じないばかりか、時としてこのオッサンの指示が不明確であったり、指示に従うと対向車と鉢合わせ

になったりする。仮にぶつかったとしてもこのオッサンが責任を取ってくれる訳ではない。このオッサンの人件費は当然公共事業の経費に含まれている。

今でこそさすがに見かけなくなってきたが、少し前までは大きなデパートでは、一階エスカレーターの乗り口脇に「エスカレーターガール」なる着飾った要員が居て、お客様が「安全に」エスカレーターが利用できるように「ご案内申し上げて」いた。

世界的なスタンダードに照らして、この国のサービス産業は何か変だと感じざるを得ない。そのおかしさは、社会全体としての過度の「安全・安心・優しさ・きめ細やかさの信

奉」に由来すると思えてならない。それも本当の安全・安心ではなく、建前としての安全・安心に。

銀行のコストを節約するためにお客様ご案内掛をやめてはどうかと提案したら、「他店との比較」でサービスが低下したと思われるのでやめられない。

道路工事現場の旗オッサンは不要だからやめてはどうかと提案したら、役に立っていないということに判っているが、万が一事故が起き

たら「万全を期していない」と世間から指弾されるからやめられない。

官庁・企業というわが国の集団組織の中で、「他人の仕事のチェックをしている」という要員の如何に多いことか。個人の不手際は組織の不手際、従ってそのような事が起きないように皆でチェックするという事だが、ミスをした個人が目に見える形で責任を取らされることは殆ど無いという優しさ（というか、生ぬるさ）。反対に手柄を挙げても個人が目に見えて報われるということが殆ど起きない結果平等主義。

そういう姿勢を見せている、というアリバイ作りの「安全・安心・優しさ」が重要であり、優先されるべきは他者（世間）の視線への「配慮」であり、責任は個人に帰属させず、全体に分散させることにより、結果、誰の責任か不明朗にし、成功失敗に関わらずリスクは一切とらない、そういうシステム・考え方をわが国社会全体として良し、としていると云う事なのだろうか。そんな国が国際競争環境のなかで今後生き残って行けるのだろうか？

〽頑張り、日本男児〽

NHK大河ドラマ『篤姫』の視聴率が良い

という。朝の連続青春ホームドラマの延長の
ような『篤姫』より、ヨン様主演の『大王四
神記』の方がストーリー展開も映像の構成も
よほど秀逸で、骨太で、かつての「面白い日
本映画」を彷彿とさせる韓国映像制作力を
感じるというのが私の見解であるが、スイー
ツ系全盛社会の風潮の中ではどうも少数意見
のようだ。ヨン様ことペ・ヨンジュンは顔こ
そスイーツ系だが、彼の演じる役柄はどれも
韓国人が「漢（おとこ）」と呼ぶところの「男
伊達」の体現者であって、決してヤワなスイ
ーツ系ではない。そこで、なぜ40代後半以
上のオバサマ達がヨン様に狂うのかを考察し
てみると、このオバサマ達が若かりし頃は、
まだ日本の男が男であった時代、『三丁目の夕
日』で堤真一演じる「お父さん」が男であつ
た時代である。男子とはかくあるべし、との
刷り込みが出来ているところに持ってきて、
顔はこんなに美しいのに様々な所作から男
オスを感じるといふギャップ、羊の皮をかぶ
った狼、市川雷蔵の再来、というところにグ
ッとくるものがあるようである。もう少しハ
ード系がお望みなら、イ・ビョンホ。男とし
て、オスとしてのカッコ良さという点で、残
念ながら日本男優陣は劣勢である。

尤も、より若い世代の日本女性も、スイー

ツ系価値観に全面的に屈服し、動物のオスと
してのセックスアピールを希薄化させてしま
った日本の男たちには不満を感じている様子
であるから、このままで行けば、日本の若い
男子諸兄は、世界からも、日本の女性からも
捨てられて、秋葉原でフィギュア（人形）を
買うか、ネットやゲーム上の仮想空間の中で
しかパートナーを見つけられなくなってしまう
ぞ。頑張れ、日本男児。羊の皮をかぶった
羊になるなかれ。

